「底が突き抜けた」時代の歩き方464

なぜ、チェチェン戦争は「やめられない戦争」なのか

ポリトコフスカヤの『チェチェン　やめられない戦争』に何度も目を通していると、「なんというひどい戦争にはまりこんでしまったのだろう」という暗澹たる呟きや叫びがどの記述からも迸(ほとばし)っている。一体、チェチェン戦争のなにが「ひどい戦争」なのだろう。戦争というものはいつの時代にも「ひどい戦争」であったし、ひどくない戦争というものはありえなかった。かつてのベトナム戦争も、ついこの間のボスニア戦争も、現在続続されているイラク戦争も、いずれも「ひどい戦争」であったし、「ひどい戦争」でありつづけている。だが、彼女がチェチェン戦争について「ひどい戦争」というとき、戦争一般における「ひどい戦争」の意味あいでいっているわけではけっしてない。

戦時下のチェチェンを隈無く足で取材を重ねて、チェチェン人に対するロシア連邦軍の大量虐殺や数々の蛮行について報告しながら、《第二次チェチェン戦争の三年めにして、チェチェン民族が衰弱の一途をたどっているということは否定のしようもない。そしてすべてはひとつの疑問に集約される。この崩壊をどうやって食い止めるのか？　子どもたちに今日より明日が良くなると信じさせるにはどうしたらいいのだろうか？　自分自身でもそれを信じるには？》という問いにどうしても覆われていく。チェチェン民族の崩壊がロシア連邦軍の圧倒的な軍事力によって押し進められていくだけでなく、チェチェン民族が彼らの特質として備えていた誇り高き勇敢さや、弱者に我が身にそうするようにすっと差し伸べることのできる美質など、チェチェン民族をチェチェン民族たらしめてきた彼ら固有の民族精神が、戦争の長期化のなかでじわじわと自壊しつつある様相において、絶望的な自問が発されているのだ。

戦争に付きものの拷問も殺戮も、それ自体十分「ひどい戦争」を刻印しているけれども、そのことを指してポリトコフスカヤは殊更「ひどい戦争」と繰り返しているわけではない。チェチェン戦争にはかつてどの戦争にもみられたことのない、新しい性質が付加されており、彼女はどの戦争にもかつてなかった、その新しい性質を刻印せざるをえなくなってしまっているチェチェン戦争に対して「ひどい戦争」だと言い放っているのである。では、チェチェン戦争に新たに刻印されている性質とは、どのようなものであるのか。《私たちは暗い時代に生きている、この空気は、連邦軍の「上層部」の欺瞞と、「下層部」の無法状態、そして上司の虚偽を見て見ぬふりをすることで兵士たちが手に入れている札束の匂いで毒されている。これらが、チェチェンというシステムを機能させているのだ。

「家に２０人ばかりの人たちが押し入ってきて、息子のパスポートを取り上げたの」と

語るのは、シュコーリナヤ通りのライーサ・アルサメルザエヴァだ。「あの子を鳥小屋に連行しようとしたのよ。私は１００ルーブル渡したわ。私は『軍には何も申し立てることはありません』と書いてサインさせられた。そして、あいつらは出ていきしなに、発電機と娘の下着を取っていったのよ」

営利主義がスタールィエ・アタギーを支配していた。「フィルターラーゲリ」に連れていかれたのは主として、賄賂を払えなかった人たちだった。家に入るなり、軍人たちは男たちを連行しない代償として金を要求した。払えば選別（フィルター）の必要はなかった。つまり、戦闘集団のメンバーとのつながりは疑われなかった。払わなければ選別が必要で、疑いを持たれた。生きた商品の値段は５００ルーブルから、３、４千ルーブルだった。年齢によって異なるが、若ければ若いほど値段が高く、時には軍人たちがその場で外見を評価して決まった。

今回のスタールィエ・アタギー村では、男性ばかりか、女性の値踏みも行われた。このあたりの常として女性の値段は男性よりはるかに低かった。その場合の要求の代償も異なっていた。男性は「鳥小屋へ連行しない」でもらうことだったが、女性については「レイプしない」でもらうためだったのだ。ある家では若い娘を「暴行しない」ことと引き替えに３００ルーブルが、別の家では５００ルーブルが連邦軍によって取り立てられた。略奪の最中、性交を拒んだ女性たちから性的な満足が得られなかった代わりに、耳飾りやネックレスがまきあげられた。

結局人びとは外に出て、焚き火を焚いた。何日もの夜をそうして過ごした。外に出てほかの人から見えるところにいれば殺したり、乱暴したりされないだろうと思ったのだ。しかし、必ずしもそれで助かったわけではなかった。》

ここに出てくる「鳥小屋」については、こう説明されている。拘留された者たちが連行される《村はずれの半ばうち捨てられた古い養鶏所》のことであり、《ここに軍人たちは臨時の本部とフィルターラーゲリ（選別収容所）を構えていた。》「鳥小屋」に《引っ張り込まれたら、良くても痛めつけられる、悪くすれば死にいたることを意味した》。因みに、連邦軍が《「検査」対象となった村のはずれ、農場、小村やただの野原》に設置している「臨時選別収容所」は「猿小屋」と呼ばれる。いずれも法律に基づいた臨時留置場ではないので、違法な拘束や拘留についての証拠は跡形もなく消し去ることができる。

「ひどい戦争」と活字にすれば、私たちは即座に映画やテレビニュースで見たいくつかのシーンを連想する。大規模な空爆や砲撃によって地域の家々と共に人間も吹っ飛んでしまったり、続出する死傷者が運び込まれる野戦病院等の施設での慌ただしさである。あるいは、難民の列に雨あられと降り注ぐ銃弾や砲弾によって、たちまち凄惨な墓場と化すシーンだ。インパクトの強い、視覚に訴えやすい、お誂え向きの戦闘場面や絵にするのに定番の爆撃シーンを戦争映画やテレビニュースが好んで繰り返し報道するので、たとえば、ポリトコフスカヤが「ひどい戦争」と言葉にすれば、私たちはどうしても自分たちがテレビや映画で何度も目にした一瞬の「ひどい戦争シーン」と結びつけて、自

分を納得させる。仕方がないのだ。戦場に送り込まれた体験どころか、銃一つ握ったこともなく、軍隊経験のない（第二次大戦以降の）戦後生まれの日本人の世代にとっては、「ひどい戦争」は映画やテレビニュースで放映される戦争場面のなかにしか存在しないのである。

戦時下のチェチェンに踏み入って取材しているポリトコフスカヤからすれば、おそらく彼女が目にすること、聞こえてくること、風の便りに伝わってくることすべてが、要するに、チェチェンの各地を駆けまわる彼女に集中してくる出来事全体が、風のそよぎや小川のせせらぎ、遠くの空を飛ぶ鳥の鳴き声さえもが「ひどい戦争」として実感されてくるのだ。戦場に踏み込んだジャーナリストが戦場から遠く離れた、平和な日常生活に浸っている私たちに必死の思いで伝えようとしていることは、映画やニュース映像にけっして回収されることのない、戦争現場に立ったものしか実感されない、細分化されているものの積み重ねのなかにみえてくる「ひどい戦争」にほかならなかった。映像に映しだされている「ひどい戦争」はあくまでも「ひどい戦争」全体の一部であり、しかも一瞬にすぎず、映像で伝えることのできない、映像の外に膨大にあふれ返っている「ひどい戦争」にどう向き合い、どう言葉にして読者に伝えようとするかという、別の戦場に彼らは常に立たされていたにちがいない。

もちろん、自分が踏み込んだ「ひどい戦争」全体に、自分が味わった細部の体験を積み重ねるなかから手探りで接近しようとするジャーナリストの必死の格闘を、彼らの報道記事から読み取って、映像のなかで固定されてきた「ひどい戦争」の思い込みの外へ一歩出ていくのは、そして「ひどい戦争」の細部の連なりとして「知る」ことの中に自分自身を放り込むのは、あくまでも私たちなのである。そうでなければ、たとえば、ポリトコフスカヤのチェチェンレポートなどに目を通す意味はない。彼女の文章に向き合うのは、映像からはけっして掬い取れない細部の「ひどい戦争」に出会うためであり、彼女が本当に「ひどい戦争」であることを強く感じている場面を「知る」ためである。彼女の目に映しだされている「ひどい戦争」に向き合うためにこそ、彼女の報告を読む必要があり、もし私たちが人種や国境に輪切りされていない普遍的な「人間」であることを願って生きているなら、そこにけっして目を背けてはならない義務も生じているだろう。

《「チェチェン」のもうひとつの場面がある。２００１年６月５日、グローズヌイ。劇場広場 ── 廃墟しかないにもかかわらず、こういう名前の広場がある。実際、劇場があった時期もあるのだ。そこに人びとが抗議集会に集まった。それぞれがスローガンを掲げている。「おかあさんを返して！」。これを掲げているのは子どもたちで、その母は「掃討作戦」で逮捕されたまま行方不明になってしまった。こんなのもある。「子どもたちの遺体を返して！」。これは「掃討作戦」で子どもたちが行方知れずになってしまった母親たちが掲げている。集会のそばを装甲車が数台砂煙をあげていく。連邦軍だ。徴兵で来た兵士たちではなく、志願して傭兵となった、陽気で使命感に燃えた屈強の男たち、

契約志願兵（コントラクトニキ）だ。覆面をし、頭にバンダナを巻き、群衆に擲弾筒や自動小銃を向けて。体が痙攣するほどの高笑いをし、そっくり返って笑い興じているので、マスクの小さな開口部からがっしりした歯並びが丸見えになっている。切れ目の入った手袋から突き出した指をかざして「おかあさんを返して！」のプラカードを指さしている。そのあげくに、「見ず知らずのおかあさんやら、他人の息子たちの遺体なんか返そうったって返せないだろ！」と侮辱的なジェスチャーをしてみせる。

そばにいる上官の将校も同じようにふるまっている。

こうしたこと、「侮辱的なジェスチャー」や「肥溜めにぶちこんでぶっ殺す」などは、すべて細かいことかもしれない。しかし、私たちが現実を知るのはこうした細かい一つひとつのことによってであって、全体的な流れによってではない。しかも、母を奪い、あるいは子どもたちを奪い、遺体さえ返さずに、その哀しみを笑いものにしている！　誰がこれを止められるのだろうか？　プーチンだろうか？　国防相だろうか？　検事総長だろうか？　そうではない。こうした人たちは細かいことを考えるようにしつけられていない。西側だけがこうしたことをとても大事にする。だからこそ彼らは西側に訴えているのだ。生き延びるために。》

これもまた、「ひどい戦争」の場面の一つ、ではない。ここに、チェチェン戦争が「ひどい戦争」であることの要素が集中している、というべきだろう。ポリトコフスカヤがこの場面に「ひどい戦争」を見出していることの確かさは、信頼できるといってよい。この場面には二つの流れが存在している。一つの流れは、「掃討作戦」で行方不明になった母を探す子どもや、子どもの遺体の返還を訴える母親たちの隊列である。もう一つの流れは、チェチェン人の抗議集会に罵声を浴びせながら装甲車で通り過ぎるロシア連邦軍の一団である。戦闘場面ではないが、チェチェン人にはロシア連邦軍（の一人一人）の粗暴な振る舞いはよくわかっていたとしても、兵士たちが口にする「侮辱的なジェスチャー」や「肥溜めにぶちこんでぶっ殺す」などの雑言はチェチェン人にとって、兵士たちが乱射する銃弾に匹敵するほどの打撃であると想像される。いや、それ以上に子どもや母親の悲痛な思いに塩を擦り込む「冷酷非道」な仕打ちであったかもしれない。

前者の流れには、《分離主義だの独立（らぎょう）だのどうでもいい。それぞれが自分の深い悲しみの中に置き去りになっている》、裸形の剥き出しにされた人間としての叫びが木霊（こだま）しているにちがいなかった。悲嘆に暮れる彼らの姿には、「チェチェン」人といった民族の区分すら突き越える、人間としての慟哭（どうこく）がくっきりと浮き彫りにされていた筈だ。もしこの光景に出会う者があったなら、誰でも自分の子どもや母親、家族のことを一瞬思い浮かべながら、彼らの「深い悲しみ」に寄り添うように立ち尽くすか、あるいは、車で通り過ぎることがあったとしても、無言で静かな振る舞いに努めるのが人間としての最低限のたしなみであっただろう。ところが、ロシア連邦軍の傭兵たちは上官も含めて、そのような人々にむかって侮辱を投げつけることしかできなかったのだ。「母を奪い、あるいは子どもたちを奪い、遺体さえ返さずに、その哀しみを笑いものにしている！」、

そんな獣のような連中とチェチェンの人々はたたかっているのである。
　傭兵たちは、チェチェンの子どもや母親たちの悲痛な叫びのなかに、自分たちの家族が全身に浴びている（かもしれない）「深い悲しみ」と折り重なるものを見出すことはなかったし、なによりも彼ら自身も何度も味わってきているだろう自身の悲しみと連なるものを感じることはできなかったのだ。敵であるチェチェンの子どもや女が喚(わめ)いているだけの、「侮辱的なジェスチャー」を投げつけたくなるような単なる集まりにしかすぎなかったのだ。彼らは彼ら自身に対してすでに獣に成り果てていたのである。ポリトコフスカヤは傭兵たちの振る舞いについて、「こうした細かい一つひとつのこと」というが、人間という存在について考えるなら、「細かい」ようにみえることのなかに、無尽の巨大な意味が沈潜しているといわざるをえない。また、彼らは「細かいことを考えるようにしつけられていない」というが、その「細かいこと」を欠落するなら、人間としては育たない。
　ソビエトの崩壊を機にチェチェンがロシアからの独立を目指すことによって、チェチェン戦争が勃発したことを考えると、１７年のロシア革命から７２年間続いた社会主義国家なるものが一体なにを生みだしたかは、このロシア連邦軍の傭兵たちの振る舞いのなかにすべて凝縮されていると思わざるをえない。一党独裁の全体主義国家はソ連社会を疲弊させただけでなく、人心をも徹底して荒廃させてきたのである。ソ連の崩壊は社会主義システムの破綻以上に、人心の荒廃が主因ではなかったのか。傭兵たちはソ連の社会で育まれてきた子どもたちにほかならなかった。彼らは自分たちがされてきたようにして、チェチェンで振る舞っているのだ。彼らの振る舞いのなかに、ソ連社会で貯えてきたすべての罪深さが堆積されてきている。だから、彼らは自分たちの悪業を自覚することがないのだ。彼らが「細かいことを考えるようにしつけられていない」ということは、そういう意味でなら、十分理解できる。
　傭兵たちの獣的な振る舞いを止められるのは、すなわち、戦争の蛮行を止められるのは西側だけである、とポリトコフスカヤは期待するが、西側の人々はイラク戦争に持つ関心の１０分の１もチェチェン戦争に振り向けることはないだろう。確かに西側は民主主義と人権が最先端にあるから、「西側だけがこうしたことをとても大事にする」と彼女がいうのはわかるが、その西側もまた、イラク戦争を機にＥＵと英米との対立が深刻化しており、その対立の枠組みからロシアとの関係を窺っているために、チェチェン問題はどうしてもロシアの国内問題に埋没させられてしまっているのが現状である。イラク戦争と比較して圧倒的に少ないチェチェン戦争の報道量のなかで、ポリトコフスカヤらのジャーナリストがロシア当局の情報統制ともたたかいながら、そのような頼りにならない西側に訴える以外に解決策はどこにも見出されないという点においても、「ひどい戦争」といわざるをえない。
《国中を縦横に荒らし回る「将校」を自称する人びとによる真っ赤な嘘と恥ずべき放縦。行動、思考、感情のパターンとしての「チェチェン現象」がいたるところに壊疽(えそ)のよう

に広がり、社会のあらゆる層を侵し、全国民的な悲劇となりつつある。私たちはそろって獣と化しているのだ》と、ポリトコフスカヤは自分が生まれ育ってきたロシアの現実の自壊を、チェチェン戦争を通して冷徹に見据えるが、人間でありうる質をどこまでも貶める「行動、思考、感情のパターンとしての『チェチェン現象』」はまた、合法的な賄賂や略奪の無限の宝庫としての「チェチェン現象」をシステム的に生み出していることを、ポリトコフスカヤは次のように指摘している。

《おかしなことと思う人もいるかもしれないが、この戦争は結局のところそれを遂行している者すべてにとって好都合なものなのだ。それぞれが自分の持ち場を得ている。契約志願兵（コントラクトニキ）は検問所で１０ルーブルから２０ルーブルずつの賄賂を四六時中手に入れている。モスクワやハンカラの本部にいる将軍たちは予算に組まれた「戦争」資金を個人運用する。中間の将校たちは「一時的人質」や、遺体の引き渡しで身代金を稼ぐ。下っ端の将校たちは「掃討作戦」で略奪する。

　そして全員合わせて（軍人＋一部の武装勢力が）違法な石油や武器の取引にかかわっている。

　そのほかにも、職位、褒賞、出世……。》

　契約志願兵が得る賄賂や将校たちが稼ぐ身代金や略奪はよくある単純な手口で、誰にも目にみえるかたちで行われている。では、前線から遠く離れた本部にいる将軍たちによる「戦争」資金の個人運用についてはどうかといえば、第二次チェチェン戦争によって、《将軍という称号を持っている人と新興財閥が同じ人びとであるケースが増えてきたこと》に端的に示されている。なぜなら、《わが国で、将軍たちが横領し、新興財閥（オリガルヒ）たちが国の資金で儲けていることを知らない者はいない》からだ。「この戦争は誰にとって必要なのか？」というテーマに即して、ポリトコフスカヤは国家予算がどのようなからくりや詐術によって結局のところ将軍たちの手に、落ち着くようになっているかを具体的かつ詳細に描きだしている。

《ロシアのビジネスのメインエンジンとして「自分の配下」の新興財閥を手なずけようとしているのだ。その結果何が起きているか？　この新興財閥と軍建設関係の将軍たちにとって、チェチェンで続いている軍事行動も、彼らが建設したばかりの施設が武装勢力の手によって果てしなく「爆破」されつづけることも好都合なのだ。こうしたチェチェンでの戦いは、長く続けば続くほどありがたい。国庫がまったく疲弊してしまうまでは……。》

《将軍であり、美しい肩章を付け、様々な栄誉を蓄積し、戦地手当、特別支給品、そのほか数々の手当をもらい、それと同時にビジネスもできることになったら……。そのビジネスは勤務の手が空いた時にというのではなく、勤務地のその場所でできるとしたら？

　ビジネスマンはビジネス上の利益を追求しようとする。彼にとって一番大事なことは付加価値を得ることであり、成功しているビジネスマンとは大きな利潤をあげるために数多の障害を乗り越えられる人のことだ。将校たちは祖国の利益に奉仕するものだ。も

し将校が同時にビジネスマンだったら？　誰に仕えることになるのだろうか？　私的なビジネスマンと祖国の利益は必ずしも一致するとは限らないのだから……。》
「祖国の利益に奉仕する」将校たちが、私的な「ビジネス上の利益を追求」するビジネスマンをも兼ねるとしたら、彼らは一体、「誰に仕えることになる」のか？　それは明白である。将軍たちが私的なビジネスマンになったとき、そこでは私的なビジネスマンが将軍をも兼任するようになったと解すべきなのだ。そうすると、ビジネスマンは将軍であることにおいても、私的な「ビジネス上の利益を追求」することになるだろう。将軍がビジネスマンになるということは、「祖国の利益に奉仕する」将軍が私的な「ビジネス上の利益を追求」するビジネスマンに取って代わることになるので、もはや「祖国の利益」は私的なビジネスマンの手に委ねられることになった、という次第なのだ。手っ取り早くいえば、将軍がビジネスマンになった時点で、国家はビジネスマンの掌中に落ちたということである。国家システムがビジネスマンの手に委ねられることになったら、戦争を始めとする国家事業のすべてにおいて「ビジネス上の利益」が追求されることになるのは、あまりにも理の当然であるだろう。
《チェチェン戦争のそもそもの発端に話題が及ぶと、大抵の人が石油だと言う。チェチェンのパイプライン王と油井王たちが、すでに１０年以上も数十万の人びとの生活を翻弄している。油井を持っている者 ── それがチェチェンでは正しいのだ。ドゥダーエフとともに戦った者たちがドゥダーエフの油井をプレゼントされた。マスハードフに忠実だった者たちがマスハードフから油井をもらった。今、戦って勝った者たちは？
　この伝統は厳しく守られている。勝った者に戦利品が与えられる。油井のやぐらとパイプラインの「禁断の穴」（石油窃盗のための）だ。チェチェンの主要な「パイ」の分配はきわめて順調に進んでいる。勝利者たち ── つまり連邦軍の管理の下に。》
　ここで言及されていることは、イラク戦争と対比させれば、わかりやすく思われる。チェチェン戦争の発端が石油にあると多くのチェチェン人がみているように、イラク戦争の発端も石油にあると多くのイラク人はみている。一方、別の声はチェチェンの独立要求がチェチェン戦争の発端であったと強く主張する。チェチェンの独立を認めれば、ロシア連邦内の他の共和国もその独立の動きに追随して、ロシアがソ連の崩壊の二の舞を演じることになるかもしれないことを恐れたからだ、というもっともな主張である。同様にイラク戦争においても、その発端は米国がイラクを米国流の「人権と自由と民主主義」の国家に改造することにある、と強く主張する声もある。イラクを米国流の民主主義国家に改造することができるなら、他の中東諸国にもその波が大きく及ぶということだ。そして現在、チェチェン戦争の勝利者であるロシア連邦軍がチェチェン石油を管理下に置き、イラク戦争の勝利者である米軍がイラク石油を管理下に置いているというわけである。
「祖国の利益に奉仕する」筈の将軍たちが一斉に、「ビジネス上の利益を追求」するビジネスマンに変身するような国家の軍隊の管理下に置かれたチェチェンの石油が、どの

ような利権の対象となって、賄賂や略奪や窃盗がその舞台上でも舞台裏でも繰りひろげられることになるかは想像するまでもなかろう。ポリトコフスカヤはチェチェンの石油によって「誰が裕福になるのか？」と、こう告発する。
《どんなことがあっても名前を出してくれるな、いっそ永遠に忘れてくれと要求したある新任のチェチェンの役人が言った。「チェチェンからは毎晩、数千トンの石油と石油製品が違法に運び出されている。ところが我々は文房具さえ買えないでいる」と。
　現代のチェチェンでは、油井と奇跡のパラダイスをめぐって血みどろのぶん捕り合いが果てることなく続いているが、それによって共和国は一銭たりとも豊かになっていない。何をする資金もないのだ。産業の復興にも、家のない人たちの住宅を建設するにも。チェチェンの石油はあらゆる人たちに利用されているが、チェチェンにだけは役立っていない。チェチェンの経済混乱が人工的につくり出されているばかりか、ロシア側によっても熱心にあと押しされていることからも危機は深まっている。
　機能している商業銀行は今もない。ひとつとして合法的な資金源がない。「石油」マネーのすべてが靴下の中かチェチェンの外にある。合法的な財政システムを整備しようとする試みは、ことごとく連邦官僚制度の上層部のサボタージュによって頓挫してしまう。モスクワにとっては銀行ばかりでなく、税務署もできるだけ長くチェチェンにできない方がいいし、機能する裁判所や一般の検察局もできない方が都合がいい。石油の飛び抜けた高収入が望ましい方向に流れ、そのベクトルを国庫の方に向け変えるようないかなる検問所もない方がいい。
　これらすべてが実現できているのは、ふたつの条件が守られているからにほかならない。第一の条件は「防御の傘」があることだ（その役は連邦軍がやっている）。第二は、チェチェンの石油複合体の正式な管理機関が機能しないということ（これもまた意図的にそうなっている）。
　石油採掘取引の無法状態は、「権力が入れ替わり、新しいチェチェンが強化されるまでの一時的な問題なのだ」と言われても信じないでほしい。問題はまさにサボタージュにある。モスクワ ── 政府、国家機関の高官たち、参謀本部 ── が経済秩序の整備を頑固に嫌っているのだ。
　モスクワがチェチェンに求めているのはただひとつ、無秩序を維持すること。混乱は儲けにとっては好都合だ、管理された混乱ほどより多くの配当をもたらすものはない。
　それで、ガソリン輸送車が昼も夜も走っている。検問所はそれに敬礼している。これが戦争のすべてだ。それぞれの油井やパイプラインの持ち主が代わるためだけにすでに数千の命が捧げられた。チェチェンの石油革命という事業のためには、まだまだ多くの命を捧げることになるだろう。この問題の価格は、数百万ドルだ。》
　そういえば、イラクの石油も（米国の）あらゆる人たちに利用されているが、イラクにだけは役立っていないのではないか。さて、グデルメス－モスクワ間の鉄道も再開され、鉄道病院に完全装備の外科病棟も開業し、春の農作業に合わせて新しいコンバイン

も購入され、なにより《チェチェンはロシアのほかの行政区と同じく独自の予算配分を受けた》ことなど、《表面上はすべてがうまくいっているように見える》裏でどのようなことが行われているのか。
《平和な生活で誰よりも先にサボタージュを行うのは、各地区や都市の大量の新チェチェン官僚たちにほかならず、彼らはコネでその地位を与えられ、仕事はしたくないが、戦時の混乱はできるだけ長引いてくれることをあからさまに望んでいる。彼らの生活は、書類に何らかの書き込みをし、改竄し、偽り、答えのない質問を並べ、考えも及ばないようなあらゆる事柄を儲けのダシに使うことで成り立っている。》書類に「２００１年４月１５日から開いている」とあるクルチャロイ孤児院に、一人の孤児もいないという不思議な事例を彼女は取り上げる。そこの院長は、《書類によればその人はとても経験豊かで、教育者として２３年勤めてきた》人で、子どもたちは自分の家にいるのに、孤児院に必要な家具や備品としての国の予算が下りていることを彼女は執拗に追求する。
《伝票によれば、ベッド１５（値段からいって、ダブル）、食事用のテーブル２６、木の椅子４０、布張りの椅子４８、布団４０、ベッドカバー４０、マットレス４０、シーツ数百セット、枕４０、タオル１５０……その他たくさん》となっているのに、それらの備品はすべて倉庫にあり、その倉庫は院長の家にあるという。「家に置いてあった方が安全ですからね」と、ほほえみながら言ってのける院長に、家に行って見せてくれと彼女は引き下がらない。
「それは不可能です」と拒む院長のほがらかさから、《彼の家は、ここから遠く離れたゲリデケン村にあり、そこでは今「掃討作戦」が行われていて、すべての道は封鎖されている》ことが明らかになる。《つまり、万歳！　戦争のおかげで教育者としての経験豊かな「孤児院」院長は家宅捜査を免れる。》
《院長はほっとしたように穏やかに微笑んでいる。彼を救ったのはゲリデケンに入る検問所で警備にあたっているスモレンスク特殊部隊の兵士たちだ。彼らは外部の者を誰も通さず、何かこそこそと説明する院長と親しげに抱き合っている。
　こういうことがチェチェン中いたるところで起きている。「役人たち」は戦争が続くことを望み、それがこの戦争継続のもっとも大きな推進力のひとつとなっている。それに関してはハンカラの将軍たち（北コーカサス合同軍）やモスクワの参謀本部に劣っていない。
　ここでは村の周辺に常駐している中級の将校たちは、地元の小物の役人たちと利害をともにするようになる。彼らのあがりのいい管区に誰も首を突っ込んでこないように、協力し合わなければならない。このためには現場の強力なやり方がある。誰にも干渉しようのない「特別措置」や「掃討作戦」だ。これらは必要な時に宣言するだけでよく、必要とあればどこの居住区でも封鎖することができる。》
　ヤフヤエフ院長とチェチェンの行政長官カディーロフは《非常に懇意だか遠い親戚》で、《今日チェチェンでの人事はまさにこのようにして決まっている。教育、経験、知

識などいらず、必要なのはコネだけ。そしてもしうまく押し込んでもらえたら、手に入れたものの分け前を差し出さなければならない。テーブルとか、ベッドとか、寝具とか。》
　このような仕組みは、それに見合った精神を当然ながら育んでいる。
《チェチェンでは児童手当も同じ精神で支払われている。たった５８ルーブルちょっとをフィフティ・フィフティで分け合うのだ。予算といううまい汁にありつくことができた責任者に児童手当の半分を残して「おっかさんは残りで満足しな」ということだ。それを望まないのなら、勝手にしろ。
「フィフティ・フィフティ」と呼ばれるビジネスは空前絶後の発達を見せている。予算にからむことのできる役人は誰でも、影響力のあるチェチェン人から予算を分け合おうと持ちかけられる。たちまち、児童手当のフィフティ・フィフティ、障害者向けの義肢手当、そして薬品の分配もフィフティ・フィフティで、つまり半分は病院、半分は市場で転売ということに行き着く。
　この方法で大事なのはすべてがチェックなしに進むことだ。横領する者にとって戦争以上に都合のいい状況は考えつけないだろう。軍事政権を中心に形成されているチェチェンの新しい官僚の大部分は「戦争でも平和でもない」状況をできるだけ長引かせることを夢見ている。濁った水、これぞまさにもっとも稼ぎのあがるチェチェンというものだ。銃撃の轟音に隠れて、何でもやりたい放題ができる。チェチェン中にはびこっている違法な石油取引、そして悪名高い「フィフティ・フィフティ」、市場で売られている人道支援品、共和国に送られてきた時は無料だったのに、保健省の職員やその身内が所有する薬局で売られている薬品。そういう連中――軍の上層部やその太鼓持ちの民間人――の誰にとっても一般市民の生活が順調になる必要などないのだ。銀行が業務を行ったり（結局まだ行っていない）、給料が支払われたり、国民が何かを信用することなど不要なのだ。
　これは単にサボタージュと呼ばれる。詮索好きや頑固者を始末してしまえば、厚顔無恥で遠慮のない横領がもっとも簡単だ。それもまた戦時という状況に起因している。ＦＳＢに駆け込んで密告さえすればいい。どこの村へ行っても誰が密告者でなぜそうなのか村人が必ず教えてくれる。軍人も一般市民も戦争によってこれ以上は不可能なほどまで堕落させられている。チェチェンは爆発性の混合物のようなものだ。暴力、穴牢、自動小銃が統治している軍支配のチェチェンが、欺瞞、コネを好む一見平和なチェチェンの裏に隠れている。》
　ポリトコフスカヤの以上の詳細な報告に接することによって、チェチェン戦争の長期化がチェチェンとロシアを、一般市民の耐え難い犠牲や深い悲しみを一切顧みることなく、戦争を長引かせることが最も好都合な社会体制に組み換えてしまっていることにおいて、「ひどい戦争」と形容する以外にない最低の暗部に堕していることが見て取れる。彼女の書物に収録されている論考「何が真実か？」で、ゲオルギー・デルルーギアンは、《チェチェンの現状がいったいどうなっているのかは誰にもわからない。なぜならば、

そこは今日調査をするのに地上で一番危険な場所になってしまったからだ。そこにアンナ・ポリトコフスカヤのこの本の価値がある》と評価して、《職業的な成功を考えるならば、ポリトコフスカヤはこれほど残酷でも危険でもない話題を選ぶことができたはず》なのに、「命がけ」でわざわざチェチェンの地獄に踏み入る彼女の我が身の危険を顧みない姿勢に触れる。

《ポリトコフスカヤはもちろんある情熱的な政治的立場から文章を書いている。その立場は、ロシアの民主主義的知識人に脈々と受け継がれてきた政治的姿勢に連なっている。一世紀前、チェーホフは遠いサハリン島まで旅をしてそこの刑務所の地獄を書いた。コロレンコは反動思想に対抗してベイリス事件（１９１１年に帝政ロシアで起きたユダヤ人ベイリスの冤罪事件）における反ユダヤ主義の欺瞞を暴いた。時代が下り、１９６０年代になると、ソルジェニーツィンが旧ソ連邦の強制労働収容所の現実を人びとに知らせようと戦った。私はここで彼らの名誉や文才を比較しているわけではない。私の真意は、ロシアの知識人が恐怖あるいは自国の恥と考えるものに対して戦う姿勢をずっと見せてきた点を示すことにある。その意味において、ポリトコフスカヤのチェチェン戦争告発は、この国に長く息づいてきた名誉ある伝統を汲んでいる。》

日常的に頻発しているチェチェン人女性への強姦事件などの情報収集に際して、彼女が《女性であることで恩恵を受けている》、逆にいえば、女性であることによって踏み入りえていることや、過酷な状況下で陥りがちな偏見からも彼女が自由であることを指摘する。《彼女の同情は市民、医療関係者、そしてとりわけ女性、それもチェチェン人女性、さらにソ連時代からチェチェンに住み暮らしてきたが、この戦争で罠に嵌まったかのように感じているロシア人女性に向けられている。この非凡な女性は、残忍な仕打ちを受けたロシア兵や警察官らまで憐れむ強靱な道徳観を見せる。これらのロシア人の多くは実際にひどい精神疾患、アルコール依存症、薬物依存症に悩んでいる。この戦争においてポリトコフスカヤは、残虐行為をやめさせよう、あるいは少なくともそれを上層部へ報告しようとする公正なまたは職業意識のあるロシア軍人に出会うことができた。この事実はかすかな希望の灯火だと言える。しかし、これらの軍人の多くはたいてい不可思議な状況で殺されることになる。》

この彼女の「命がけ」の報告を読むということは、どういう行為であるか、いやあらねばならないか。少なくとも彼女は知ってもらうことを望んでいるわけではあるまい。「知る」ことからなにかが始まっていくことに、彼女の祈りは集中している筈だ。なにが始まっていくのかは、彼女は注文を付けない。なにが始まっていこうとも、そのことが現在起きているだけでなく、これからも起きるであろう残酷な戦争を阻止する力に合流してほしいという必死の叫びが、文章の行間から響き渡ってくる。「知る」ことを「知る」ことだけに留(とど)め置かないでほしい、「知る」ことが現実的な力として奔出する通路も必ず探してほしい。彼女の「命がけ」の報告は私たちにそのことを突き迫って止まない。

２００５年２月６日記